

タブロイド地域紙「市民プレス」第71号(2016/15発行)の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

- PAGE 2 足利政権の衰退 山内、扇谷両上杉氏の争い 後北条氏三代
- PAGE 4 「長享三戦」の図 -PAGE 5 堀越公方、政知の活動
- PAGE 6 今川氏客将の伊豆討ち入り -PAGE 7 「伊勢新九郎」とはどんな人？
- PAGE 11 北条早雲は小田原城を奪う -PAGE 13 「立河原の戦い」は・・・
- PAGE 14 伊豆討ち入り相模平定絵図 -PAGE 17 古河公方と山内上杉氏の提携
都で勃発した「永正の錯乱」は -PAGE 20 関東管領、古河公方の動静は・・・
- PAGE 23 領国の拡大、甲斐・駿河に出兵 -PAGE 26 氏綱の支城体制が確立する
- PAGE 28 北条氏康が跡を継ぐ -PAGE 30 河越城の攻防 -PAGE 35 年表



足利政権の衰退 山内、扇谷両上杉氏の争い

後北条氏三代

長享の乱は・・・

山内上杉家の顯定(あきただ)(関東管領)と扇谷上杉家の定正との間の争いで、長享元年(1487)に始まった。

太田道灌が暗殺されて・・・

文明十八年(1486)の七月、相模国糟谷館(現・神奈川県伊勢原市)の上杉定正の許で、その配下によって謀殺された後、道灌の嫡男、資康は江戸城に戻って家督を継承したが、定正が江戸城を占領して彼を放逐する(江戸城の乱)。

扇谷上杉家の家中では・・・

信望が高かった道灌が誅殺されたことは、扇谷上杉家中に動揺をもたらした。定正の実兄で相模三浦氏の当主だった高救が、定正に代わろうと図ったため、先代の当主で養父に当たる三浦時高から追放されるという事件が発生する。

戦乱の発端は・・・

翌長享元年（1500）、顕定と実兄の定昌（越後守護）は、扇谷上杉家と結んでいた長尾景人の弟、房清を討ち、下野国足利庄勸農城（現・栃木県足利市）を奪った。ここに両上杉家の戦いは勃発した。

定正の本拠を襲ったが・・・

顕定は実父（越後守護上杉房定）の支援を受けて、長享二年二月、太田資康や三浦高救とともに本拠の武蔵国鉢形城から一千騎をもって発進し、定正の本拠だった糟谷館を制圧しようとした。定正は留守を弟の朝昌（定正の養子、朝良の実父）に任せ、武蔵の河越城に滞在していたが、直ちに二百騎でこれを追跡し、顕定軍を糟谷館郊外の実蔭原（現・神奈川県伊勢原市）で奇襲した。これを予想しなかつた顕定軍は潰走したが、定正側も朝昌の居城の七沢城（同厚木市）を失った。

顕定は三度も敗れた・・・

憤慨した顕定は六月、河越城を襲おうとしたが、今度は先に、顕定に反逆して逃亡していた長尾景春が、足利政氏（成氏の子、父の隠居後に古河公方を継ぐ）の援軍を引き連れて定正軍に加勢したので、須賀谷原（現・埼玉県嵐山町）で、定正軍はまたもや顕定軍を退ける。

十一月、定正軍が鉢形城に攻め寄せたため、顕定軍は高見原（同小川町）、鷹野原（同寄居町）で迎え撃ったが敗北した。

山内・扇谷両上杉の軍勢が激突した実蔭原・須賀谷原・高見原（鷹野原を含む）の三度の戦いは「長享三戦」と呼ばれ、いずれも扇谷上杉陣営の勝利に終わった。しかし、太田道灌の謀殺後の軍民の離反は続き、逆に連敗した山内上杉陣営は後方に越後・上野国両国を有していたので、その支援によって鉢形城を保ち続けた。



堀越公方、政知の活動

去る文明十四年の年末、山内、扇谷両上杉氏と古河公方との和解（都鄙合体）が成立したので、堀越公方の支配圏は伊豆一國のみに押し込められた。公方の政知は方向転換を図り、長享元年に、次男の清晃（後に十一代將軍義澄）を上落させて、將軍義政と対面させている。

堀越公方家内の紛争が起こる

政知の嫡男、茶々丸は、つづく二人の子、清晃と潤童子（母親は武者小路隆光の娘の円満院）に対して異母兄となり、素行不良の廉で、父親の命により軟禁された。さらに、弟の潤童子が世子（世嗣ぎ）に指名されたため、茶々丸は、これを恨んでいた。

延徳三年（1501）四月、政知が病いに倒れて死亡すると、牢番を殺して脱獄した茶々丸は、弟の潤童子とその母親を殺害し、事実上の堀越公方となる。

將軍義政と弟の義視も亡くなる

遡って、その前々年の長享三年三月、將軍義政の子で後継者となった義尚が陣中で病死、翌、延徳二年（1500）一月には、東山の銀閣が完成するのを待たずして義政が死去した（享年五十五才）。また、義政の弟で、義尚と対立していた義視も、政知（義政、義視の兄となる）が亡くなる直前の延徳三年一月に死亡し、將軍家は総崩れとなった。

義材が後を継いで十代將軍に・・・

義尚に男子が生まれなかったので、義政の正室富子は、自分の妹と義視との子を將軍に擁立した。

延徳二年七月、將軍となった義材は、当初、前管領の畠山政長とともに独自の権力を確立することを企画した。しかし、応仁の乱で東軍のヘッドを務めた細川勝元の後継として、將軍を凌ぐ権力をもつ、幕府管領の一人、細川政元と鋭く対立する。一方、義材は、政元の反対を押し切って、翌延徳三年八月、義尚の遺志を継いで、六角高頼の征伐を再開する。自ら近江に出陣し、高頼を追放することに成功した。しかし、

清晃が新將軍に・・・

明応二年（1493）四月、義材が都を留守にしている間に、政元・富子らのクーデター（明応の政変）が起こり、義政の異母兄に当る、清晃（法名で、堀越公方、足利政知の子）が將軍として擁立される。

今川氏客將の伊豆討ち入り

権力の座に就いた清晃（還俗して義暹といい、さらに義高、義澄に、なお正式な就任は翌年）は、

母と弟・潤童子の敵討ちを、茶々丸の近隣に城を持つ、駿河今川氏の客将（きやくしやう）（きやくしやう、とも、客分の将）、伊勢新九郎（興国寺城々主）に命じた。その年、夏か秋頃、新九郎は命を奉じて伊豆に侵攻し、堀越公方から同国を奪う。堀越公方は滅亡して、鎌倉公方の系譜を引く古河公方のみが存続することとなる。

後世の軍記物には・・・

「伊豆国の兵士の多くが山内上杉家に動員されて上野国の合戦に出陣したため、手薄になったことを好機と捉え、早雲の手勢と今川家の当主、氏親に頼んで借りた人を合わせた五百人が、十艘の船で清水浦を出港した。駿河湾を渡って西伊豆の海岸に上陸し（次頁の地図を参照）、早雲の兵は一挙に堀越御所を急襲して火を放ち、茶々丸は山中に逃げて自害に追い込まれた」と書かれている。但し、最近の検証では、追放されたが、生き延びたともいわれたという。

「伊勢新九郎」とはどんな人？

出自には不明な部分が多く、生れた年についても二説があった。ようやく近年になって、室町幕府の政所執事を務めた伊勢氏の出身とする説が有力となる。「伊勢新九郎盛時」の名は文明十三年（1481）から文書に現われ、文明十五年、九代將軍義尚（もろしげしやう）の申次衆（もんじしやう）（將軍に取

次ぐ役）に任命されたという。長享元年（1489）には奉公衆（ほうこうしゆ）（幕府の武官）となり、幕府に出仕している間に、建仁寺と大徳寺で禅を学んだ。

文明八年に始めて駿河に下向

新九郎の姉（又は妹）が駿河の守護、今川義忠の正室（北川殿と呼ばれる）となっていたが、文明八年（1476）、義忠が不慮の死を遂げたためお家騒動が勃発する。

嫡男の龍王丸はまだ幼少だったので、家臣らが父義忠の従兄弟の小鹿範満（おしかのりみつ）を擁立したため争いとなった。龍王丸が成人しても範満は家督を返そうとせず、家督奪取の動きを見せ、龍王丸を圧迫した。

伊豆、相模に進出する

文明十九年（1487）、北川殿と龍王丸は京都で九代將軍義尚に仕えていた伊勢新九郎に助けを求めたので、新九郎は駿河へ下向し、石脇城（現・静岡県焼津市）を拠点に兵を集めて駿河館を襲撃、範満を殺害した。

龍王丸は元服して氏親（うぢちか）（「氏」の字は本家・足利氏の通字（ふたじ）に由来）と名乗り、今川家の当主となって、新九郎には富士下方十二郷と興国寺城が与えられた。このことが、新九郎にとって、伊豆、相模に進出する機縁となった。

早雲庵宗瑞と名乗る

新九郎は出家して法名の「早雲庵宗瑞」となる。その時期は確かではないが、延徳三年（1491）ころまで、「伊勢新九郎」としての文書が残っており、史料上で「早雲庵宗瑞」となった明応四年（1495）までの間に出家した、と考えられている。また後世になると、「早雲」として、また、北条氏と名乗ったので、「北条早雲」として広く知られるようになる。

伊勢氏は身分の高い一族だったが、鎌倉幕府を支配した北条氏の名称を継承したのは、関東の旧勢力に対して外来の侵略者と見なされることを避けるためだったようだ。なお、後世の歴史家は両者を区別するため、後を冠して「後北条氏」と呼ぶ。そこで本文でも、以下、「北条早雲」の名称を使うこととする。

相模国、三浦家の内紛が勃発

明応三年（1494）八月、定正の名代として相模の東西半分ずつを支配していた小田原城の大森氏頼が、また続いて九月には、三崎城の三浦時高が亡くなり、後継を巡って三浦家

は内紛に陥る。

大森氏頼の妻は三浦時高の姉妹なので、義兄弟となる。大森家の家督は次男が継いだが、三浦家では、養子縁組の後に実子が生まれたため、養子の高救（上杉持朝の次男、定正の兄）と仲違いし、その子、義同よしあつとともに追放する。

しかし義同は・・・

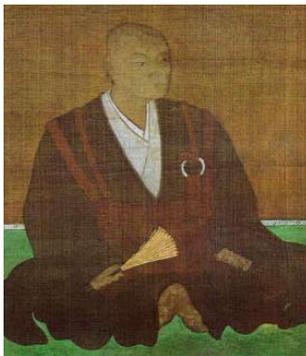
大森氏の支援を受けて三崎城を攻め、三浦家の当主の座と相模守護代職を手に入れたという。ただし、軍事的な内覧を否定し、時高の死後の混乱に乗じて三浦氏に復帰、家督を奪ったとする説もある。

上杉定正が戦場で死亡する

その年の十月、上杉定正は、鉢形城の上杉顕定を討つために北条早雲の援軍を仰ぐ。再び高見原に出陣して顕定と対陣したが、荒川を渡河しようとして落馬、死亡する。享年四十九才だった。

定正に大森氏頼、三浦時高を加えた三将の喪失は、扇谷家にとって大きな痛手となった。

扇谷上杉家は定正の甥よもじの朝良が養子となって継承したが、戦況は大きく変化する。関東管領、山内上杉家の実力は扇谷上杉家を格段に上回り、古河公方の足利成氏は一転して上杉



北条早雲像（早雲寺蔵）

顕定側に支持を変える。また、

太田道灌の嫡男、資康は・・・

家督を継いで間もなく、定正の追っ手に攻められて江戸城を追われ、甲斐国に逃れたが、長享の乱が勃発すると、三浦高救（定正に追われていたが、実は定正の実兄）とともに顕定の軍に加わる。

これが機縁となつて、資康は三浦高救の孫を妻とした。定正が死亡して、資康は扇谷上杉家への復帰が許される。新当主の朝良に仕え、菅谷城（現・埼玉県嵐山町）に移る（のち、永正二年＝1505のころ江戸城に帰還する）。

北条早雲は小田原城を奪う

明応四年、北条早雲は足利茶々丸の探索・討伐を名目として、甲斐国に出兵して、守護武田信繩のぶづなと戦う。また、早雲は城主の大森藤頼から小田原城を奪った、との説があるが、事件の年次については不確かだ、翌年の明応五年以降、ともいわれている。

なお、都では、この年明応五年五月、義政の正室・富子が亡くなる。

先年（明応二年）伊豆に討ち入りした早雲は、伊豆国韮山城（現・伊豆の国市）を新たな居城として伊豆国の統治を始めた。茶々丸の悪政に苦しんでいた伊豆の小領主や領民はたち

まち早雲に従つた、といわれている。

管領上杉顕定は上戸陣に

明応五年（1506）、軍勢を率いて相模国に攻め入り、七月、早雲の弟・伊勢弥二郎が立て籠つていた小田原城を落とす。この戦いで相模国西部を押さえたが、武蔵河越城に入って定正の跡を継いだ上杉朝良に対して軍を進める。

翌年の明応六年には、前線基地を武蔵上戸（現・河越館跡）に置いて古河公方の政氏を招く。政氏は数ヶ月の在陣の後、古河に帰還したが、上戸陣はその後七年もの間山上杉家の陣所となつた。

成氏が死去、政氏が古河公方に

明応六年九月、古河公方の足利成氏が六十四才で死去、臨終のとき、嫡子の政氏を呼び、「再び鎌倉に帰還して関八州を取り戻すことが孝行である」と言い残したという。政氏はすでに延徳元年（1489）讓位されて家督を相続し、父と同様に將軍義政から偏諱を受けて政氏と名乗つた。

早雲は伊豆を平定

明応七年、早雲の軍勢は、伊豆の南端に在つた深根城を討ち、匿われていた茶々丸はここ

で自刃した、とも伝えられる。但し茶々丸の最期については、諸説があつて明らかではない。
明応の大地震に襲われる

この年八月、南海トラフ（四国の南の海底のトラフへ溝のこと）に沿った巨大な地震が発生した。多くの古文書に記述されているが、津波が襲い、多くの死者が出た。

早雲は三河国に侵攻する

今川氏の隣国、三河の安祥城（現・愛知県安城市）を攻める。城主は松平長親（徳川家康の高祖父）だった。しかし、敗北して失敗に終わった。

「立河原の戦い」は・・・

永正元年（1504）九月、武蔵国立河原（たちかわのはら、とも読む、現・東京都立川市）で、上杉顕定・足利政氏らの連合軍と上杉朝良・今川氏親・北条早雲らの連合軍との間で行われた大規模な合戦だった。長享の乱の事実上の決戦でもあった。

享徳の乱を通じて勢力を伸ばした扇谷上杉家と上杉氏の宗家として代々関東管領を継いできた山内上杉家との間で繰り広げられた長享の乱は、扇谷上杉家当主・上杉定正が健在のときは互角の戦いを続けてきた。しかし、定正の死後、山内上杉家当主・上杉顕定の反撃と第三の勢力として、古河公方足利政氏と顕定との同盟によって扇谷上杉家は苦境に立

たされた。

扇谷上杉家の新当主の朝良は

定正の甥で、駿河守護・今川氏の客將の北条早雲に対して、相模西部の中心となる小田原城を譲り、軍事支援を要請した。早雲は当主・氏親の後見人的な存在だったので、北条・今川軍の支援が期待できる。朝良は再び勢力を回復して、戦況は一進一退を繰り返す。

一方、

顕定は上戸陣に釘付けとなる

既述のように、顕定は、明応六年（1497）、武蔵国上戸に拠点を構える。扇谷上杉家が拠点とする河越城を攻撃するためだったが、計画は悉く失敗、



以後七年近く入間川を挟んだこの地に釘付けとなった。

両陣営はそれぞれ援軍を求める

永正元年、八月、同盟関係にあった足利政氏の援軍を得た顕定は、この機会に河越城を攻めることとし、実弟の越後守護上杉房能に援軍派遣を依頼する一方、自ら兵を河越城下へと進め、翌日から同城の攻撃を始めた。対する朝良は早雲・氏親に援軍を求める一方、これを堅く守り続ける。

早雲は小田原城を出発する

九月となり、江ノ島に達し、また今川氏親が駿府を出発した。また顕定は一転して陣を武蔵国白子（現・埼玉県和光市）に移して、先に江戸城を攻め、南北から河越城を挟撃する策を取ることにした。

その間に早雲は武蔵国枳形城（現・神奈川県川崎市）に入り、氏親も同城に入る。これを受けて顕定らも南に向かって兵を進める。

合戦で多くの戦死者を出す

河越城を守っていた扇谷上杉（朝良）は今川軍に合流し、北条軍も加わって多摩川を渡河、立河原に上陸した。これを知った山内上杉（顕定）・古河公方連合軍は、九月二十七日の辰

の刻（朝八時頃）、立河原に駆けつける。正午頃から合戦が始まり、戦いは夕方まで続いた。山内上杉側は苦戦を強いられ、ついに潰走した。この戦いで山内上杉軍は、当時の戦いで稀なる二千人もの戦死者を出して多くの諸将を失った。顕定は本拠地のあった北武蔵の鉢形城に命からがら逃れ去った。

大敗の後の顕定が再び挑戦・・・

顕定と合流するために、越後では主君・上杉房能の命を受けた越後守護代・長尾能景は、出陣の準備を進めていたが、立河原での顕定大敗の報を聞いて鉢形城に入った。

能景は顕定に対して、朝良が兵を休めている今こそ好機であると力説して出陣を説いたので、越後軍が主力を占める顕定・能景連合軍は十一月、突如河越城を攻撃する。

兵を休ませ、時期をみて顕定を討つ算段をしていた朝良は十二月、上戸で衝突したが、能景は朝良恐れるに足りずと見るや、その勢いで櫛田城（現・東京都八王子市）を取り囲み、翌日には扇谷上杉方の城主・長井広直を討ち取って山内上杉方の三田氏宗を城主にすると、続いて実田城（現・神奈川県平塚市）を攻め落として扇谷上杉の相模守護代上田正忠を捕虜にした。これによって扇谷上杉領と今川・北条領は遮断されたのである。

翌永正二年（1505）に入ると、再び顕定・能景の軍勢は河越城を包囲し、これに抗する

術がなかった上杉朝良は降伏を表明したので、長享の乱はここに終結した。

古河公方と山内上杉氏との提携

顕定は古河公方⇨関東管領体制の再構築を図り、両上杉の和解後、翌永正三年、古河公方・政氏の弟の顕実（成氏の次男）を養子として迎え入れる。ところがすでに顕定には、養子として、同じ山内上杉の名門から出た憲房があり、家督の後継は不安定だった。

永正四年、顕定の養子上杉憲房と朝良の妹の婚姻が成立して山内・扇谷両家の同盟関係が復活する。

都で勃発した「永正の錯乱」は

細川政元の暗殺を発端とする室町幕府管領細川氏の内訌である。前述したように、明応の政変で専制権力を樹立した政元であったが、実子はおらず、兄弟もいなかった。そのため京兆家（細川一門本宗家）では、関白・九条政基の末子の澄之、細川一門の阿波守護家から澄元、さらに京兆家の分家の野州家から高国の三人を迎えて養子にした。

分裂抗争の芽を胚胎した細川家では、永正四年（1507）六月、細川政元が、澄之を擁する内衆（家臣）の謀略で殺害された。細川氏は幕府の権力を掌握していたため、將軍職を

めぐる抗争も絡んで、畿内は長い対立抗争状態へ突入していく（両細川の乱）。

十一代將軍義澄は・・・

明応の政変（明応二年⇨1503）によつて擁立されたが、実権は細川政元や富子、伊勢貞宗らに握られていた。成長した義澄は、自ら政務を行おうとしたが、政元と対立する。永正四年に政元が暗殺されたが、翌年、前將軍・義尹（義材より改名）を再び擁立する情勢になると、近江国の六角高頼を頼つて都から逃れる。

義尹が十代將軍として復帰する

幽閉されたのち、諸国に下向していた十代將軍・義材（義尹）は、永正五年四月、周防国の大内義興の軍事力に支えられ上洛する。細川家の高国らに迎えられて、六月、京都を占領し、七月には將軍職に返り咲く（永正十年に義植と改名）。

関東の平和は突然破られる

山内・扇谷両家の婚姻が成立した直後、顕定の片腕ともいえる存在だった弟の越後守護上杉房能が、守護代長尾為景（上杉謙信の父）らが擁する上条定実軍に追われて自害した。これに激怒した顕定は、戦力が回復した永正六年（1509）に長尾為景の討伐の兵を挙げ、

越後に進軍する。顕定は出発に先立つて上杉朝良と会談して誓書を交わしている。すると、その留守を狙って旧領のある上野に戻っていた長尾景春が再び反乱を起こし、更に北条早雲が突如扇谷上杉家との同盟を破棄して相模中部への侵攻を開始した。八月、隙をついて早雲は江戸城に迫った。上野に出陣していた朝良は反撃に出て、翌年まで早雲と武蔵、相模で戦う。

関東管領、古河公方を巡って

その年、永正七年、上杉顕定が定実・為景軍の返り討ちにあつて戦死すると、遺された二人の養子（足利成氏の子の顕実と憲房）が次期関東管領を巡って内紛となり、さらに古河公方家では、顕実を支援しようとした足利政氏とこれに消極的な高基が対立、またその弟の義明まで加えた古河公方の地位を巡る内紛が発生した（二連の戦いを総称して「永正の乱」と呼ぶ）。上杉朝良は山内上杉家と古河公方家の内紛を收拾しようと奔走する。

権現山城では・・・

扇谷上杉の家臣で、山内上杉領だった神奈川湊を支配下にしていた上野政盛は、長享の乱でこの地を奪われた。これを恨んだ政盛は、権現山城（現・横浜市）で挙兵する。永正七年七月、対する上杉両家の朝良、憲房が権現山城を包囲すると政盛は激しく抵抗した。援

軍として駆けつけた北条早雲も政盛に撃破される。だが、ついに落城する。

さらに相模三浦氏の当主の義同は、早雲が相模に向かって進出すると対立する立場となつて、小田原城の早雲を攻める。すると逆に早雲は相模の岡崎城を攻撃する。

旧將軍派と復帰將軍派との争い

永正八年（1511）八月、將軍に返り咲いた義尹を支援する細川高国・大内義興と、前將軍の義澄を支援する細川澄元との間で、幕府の政権と細川氏の家督をめぐる戦い（山城国船岡山ふなおかの船岡山合戦）、高国・義興連合軍が勝利する。同年八月、復帰を目指していた前將軍の義澄は、決戦の直前に病死した（享年三十二才）。

早雲は相模への攻勢を強める

永正九年（1512）、早雲は岡崎城（現・伊勢崎市）・住吉城（現・逗子市）を攻略し、三浦義同、よしおき義意父子を三崎城（新井城ともいう）に追い込む。さらに三浦氏を攻略するため、玉縄城（現・鎌倉市）を築く。

関東管領、古河公方の動静は・・・

上杉顕定の死後、山内上杉家を継ぎ、関東管領となつた顕実は、同じく顕定の養子の憲房と対立して、実兄の古河公房・政氏の子、高基を見方につけて対抗した。顕実は支援を受けて

武蔵国鉢形城に拠つたが、永正九年に敗北して実権を喪失する（永正十二年に病没）。一方、同年古河公房として跡を継いだ高基は扇谷上杉、山内上杉、両氏に対抗して勢力拡大に奔走した。

早雲はついに相模を平定する

永正十三年（1516）、三崎城を攻略して相模三浦氏を滅亡させる。さらに房総半島に渡つて翌年まで転戦した。

早雲はその翌年、家督を嫡男の氏綱に譲り、虎の印判状の使用を始める。永正十六年、早雲は葦山城で死去（生誕の日は不確かだが、康正二年として、享年六十四才だった）。

氏綱が家督を相続して

父親の時代には葦山を居城としていたが、氏綱は、それまで在番していた小田原城を本城として、相模国の神社造営の事業を活発化し、「相州太守」を名乗った。

大永三年（1523）、伊勢氏から北条氏への改姓を行う。これは、鎌倉幕府執権北条氏が相模守・武蔵守を歴任した事実によって、両国の支配を正当化するためだったようだ。

江戸城を攻略したが・・・

氏綱は、山内・扇谷両上杉氏の勢力圏だった武蔵国に進出し、翌四年には太田資高を寝返らせて、城主の扇谷・上杉朝興（ともちか、叔父の朝良の養子、定正の弟、朝昌の子となる、朝寧の子ともやす）

なわち朝昌の孫）の江戸城を攻略する。岩付、蕨城を落とす、毛呂城主を味方に取り込む。しかし、態勢を立て直した朝興は・・・

逆襲に転じて奪い返す・・・

大永五年、氏綱は、岩付城（現・さいたま市岩槻区）などの武蔵の諸城を失う。さらに朝興は山内上杉家、古河公方、甲斐の武田氏とも手を結び、また早雲の時代には友好な関係にあった上総の真里谷武田氏、小弓公方、安房の里見氏にも呼び掛けて、氏綱を包囲した。

鶴岡八幡宮の戦いが勃発する

翌、大永六年（1526）、北条氏の脅威を感じていた安房の里見氏は、数百隻の船を連れ、三浦半島から鎌倉に向かって侵攻した（『里見軍記』、『北条記』）。鎌倉に近い北条氏の居城、玉縄城を脅かす意図があったようだ。戦いは鎌倉市中に移り、乱戦となる。里見軍は鶴岡八幡宮の社殿に入つて宝物を奪い、破壊したが、合戦中に出火して炎上した。北条勢は玉縄城に向かったが、城を守る北条氏時（氏綱の弟）はこれを撃退し、北条氏は三浦半島一帯を防衛した。

上総・安房国の内訌

敵方陣営に侵攻しても奪回され、四面楚歌に陥った氏綱は、幸いにも、敵方陣営の内紛

によつて救われる。天文二年（1533）、里見氏で内訌が起こり、当主の義豊が叔父の実堯らを粛清した（稲村の変）。氏綱は実堯の遺児・義堯を援助して義豊を殺害させ、義堯は家督を奪つたので、里見氏は包圍網から脱落する。また、小弓公方を擁立する真里谷武田氏でも内紛が起き、小弓公方の勢力は弱まった。

領国の拡大、甲斐・駿河に出兵

関東に勢力を拡大する一方、父・早雲の代から形式的に主従の関係にあつた駿河の今川氏との同盟に基づいて、甲斐の武田信虎と甲州・相州の国境で相争う。天文四年（1535）には今川家当主・氏輝の要請によつて甲斐都留郡に出陣、山中の戦いで武田信虎の弟・信友を討ち取る。

翌、天文五年、今川氏輝が急死すると家督を巡つてお家騒動（花倉の乱）が起こると、氏輝に実子がいなかつたので、氏綱は氏輝の弟で、仏門に入つていた梅岳承芳を支持した。承芳は今川義元として家督を相続すると、翌年、武田信虎の娘定恵院を娶つて甲駿同盟を成立させる。氏綱はこれに激怒して相駿同盟が破綻、今川氏との抗争が勃発した（河東の乱）。後北条軍は駿河国の河東地方（富士川以東）に侵攻して、今川氏との主従関係を完全に解消して独立を果たした。

天文六年（1537）、扇谷上杉氏の朝興が本拠の河越城で病死する。朝興は叔父・朝良の養子だが、過ぐる天文元年、朝良の意向に叛いて自らの実子、朝定を後継者として指名していたので、若年の朝定が跡を継ぐ。これを好機とみた氏綱は武蔵に出陣して河越城を陥れ、三男の為昌を城代に置いた。

今川氏との抗争へ

河東の乱（天文五年〜同十四年）が駿河国で起こつた。今川氏と相模国の北条氏との戦いで、「河東」は争奪の対象となつた富士川以東の地域をいう。

駿河の守護大名・今川氏と、相模の新興・戦国大名の北条氏は、駿相同盟を結んで甲斐の武田氏と抗争していた。しかし、今川氏側では若くして九代当主・氏親の跡を継いだ氏輝が武田と和睦する。さらに後継者争い（花倉の乱）を制して、天文五年に当主となつた氏輝の弟、義元は翌天文六年二月に甲斐国守護武田信虎の娘、定恵院を正室に迎え、甲駿同盟は強化された。

駿相同盟は破綻した？

北条氏は甲相国境で武田方と抗争していたので、甲駿の同盟を駿相同盟の破綻と看做した北条当主の氏綱は、二月下旬、駿河に侵攻する。義元は出陣して氏綱の軍勢と争つたが、

た三男・為昌^{ためまさ}は後に河越城主も兼ねて広大な領域を管轄し、嫡男・氏康に匹敵する重要な地位を占めるようになった。

氏綱は、築城や寺社造営のために積極的に職人集団を集め、商人・職人に対する統制を行う。

鶴岡八幡宮の造営

領国拡大以外の大事業として、鎌倉鶴岡八幡宮（現・神奈川県鎌倉市）の造営がある。既述したように、鶴岡八幡宮は大永六年（1526）、戦火で焼失した。造営事業は天文元年（1532）から始まり、興福寺の番匠^{ばんしやう}（今の大工）を呼び寄せて翌年から工事が着手された。氏綱は関東の諸領主に奉加を求めたが、両上杉氏はこれを拒否する。天文九年に上宮正殿が完成、氏綱ら北条一門臨席のもとに盛大な落慶式が催された。

ただし、この造営事業は氏綱の没後まで続いて完成は氏康の代の天文十三年（1544）となる。源頼朝以来、武門の守護神たる鶴岡八幡宮の再興を主導することは、執権北条氏や鎌倉公方という東国武家政権の後継者の立場を主張する意味を持っていた。

氏綱は死去する

氏綱に敗れた扇谷上杉朝定は、山内上杉家の上杉憲政と手を結んで反攻の兆しを見せ、さらに今川軍との戦いも長期化する形勢の中で、天文十年（1541）に病に倒れて死去した。享年五十五才だった。

北条氏康が跡を継ぐ

嫡男の北条氏康は第三代の当主となる。氏綱は若い氏康の器量を心配して、死の直前、氏康に対して五か条の訓戒状を伝えている。

氏康はすでに・・・

享徳三年、十六才の初陣で戦い、武蔵の上杉朝興勢に対して勝利した（小沢原の戦）。天文六年（1536）、二十三才、敵対していた甲斐の武田氏が、駿河の今川義元と婚姻によって同盟を結んだので、その年二月、氏綱と共に駿河に侵攻し、駿河東部の河東地域を支配下に置いた（第一次河東一乱^{いちもんらん}）。

河越城、国府台の戦いで

同年七月、氏康は河越城の攻略などに出陣して戦功を重ね、翌年の国府台の戦いでは、父と共に戦って打ち勝つ。同年同月、父子で鎌倉鶴岡八幡宮に社領を寄進、同年將軍足利義晴から巢鶴^{すたか}（巢鷹とも、狩猟用の鷹の籠）を贈られている。

甲相同盟が成立

一方、甲斐では天文十年、武田信虎が駿河に追放され、嫡男の晴信（信玄）が当主として信濃への侵攻を開始する。

相模でも氏綱が死去し、家督を継承した氏康は、河東地域で今川氏と対峙するが、これと平行して北関東への進出を企てる。利害が一致した武田・北条間で天文十三年（1544）、甲相同盟が結ばれた。

駿河国河東を失う

第一次の河東の乱で敗れた今川義元は、天文十四年、占領された東駿河を奪還すべく、山内、扇谷両上杉氏と連携して、軍事行動を開始する。

北条氏康は駿河に急行したが今川勢に押されて三島に退却した。さらに長久保城（現・静岡県駿東郡長泉町）を攻略される（第二次河東一乱）。しかも在陣中に、関東では義弟・北条綱成が守る河越城が両上杉の大軍に包囲された、という知らせが届く。

挟み撃ちに苦しんだ氏康は絶対絶命の危機に陥った。今川義元との和睦を模索し、幸いなるかな、その年十月下旬、武田晴信の斡旋によって、停戦が成立した。十一月、北条氏は長久保城を今川氏に明け渡す。

河越城の攻防

氏康は河越城に向かったが・・・

駿河の戦いを取めた氏康は、連合軍に包囲された河越城に向かう。一方、氏康の妹婿に当たる古河公方の足利晴氏が、関東管領の山内上杉氏に支援されて路線を変え、兵士を動員する。和睦した両上杉氏との三者同盟が締結され、北条氏への総反撃を決める。

戦乱の経過は・・・

当時の史料が極めて少ないので、後世に成立した軍紀、伝承に拠らざるを得ないことは遺憾であるが、先ずストーリーを紹介して、最期に問題点を論ずることにしたい。

河越城を包囲した連合軍は・・・

約八万といわれ、上杉憲政（関東管領の山内上杉家）、上杉朝定（扇谷上杉家）、古河公方の足利晴氏、その他関東の諸大名は、天文十四年九月廿六日（1545年10月31日）、挙って河



北条氏康像（早雲寺蔵）

越城を包囲したといわれる（関東の全ての大名家が包囲軍に参加し、参戦しなかったのは、下総の千葉利胤のみだったとも）。

北条氏の守る河越城は

氏康の義弟・北条綱成で、約三千の兵で守備していたが、連合軍の山内憲政は城の南に陣を張り、扇谷朝定は城の北、などが陣をしき、三方を包囲する。

食糧を十分に蓄えて籠城した綱成は半年も耐え抜き、戦況は数ヵ月間膠着状態となる。だが大軍の包囲に対して、増援がなければ落城は時間の問題だった。

約八千の兵を率いて河越城に向かった氏康は、河越城へのルートを確認するため、扇谷山内氏に仕えていた太田資顕に工作した、といわれている。

氏康は奇襲を試みる・・・

長期にわたる包囲作戦に飽きて上杉方の戦意が低下、軍律も弛緩していたことを見抜いた氏康は奇抜な戦術を試みる。使者を申し出たのは、救援軍の福島勝広（北条綱成の弟）だった。彼は単騎で上杉連合軍の重囲を抜けて河越城に入り、兄の綱成に奇襲の計画を伝えた。

氏康の大胆・狡猾な作戦は

上杉軍に対して偽りの降伏を申し出て、詫び状を出し続ける、というものだった。

まず、公房の足利晴氏に対しては、諷訪左馬助に依頼して、「城兵を助命してくれれば城は明け渡し」と申し入れ、また上杉方には常陸の小田政治の家臣、菅谷貞次に依頼して、「綱成を助命してくれるならば開城し、今までの争いについても和議の上、我らは公方家に仕える」と申し入れた。

しかし、上杉軍はこれを受け入れず、逆に北条軍を攻撃したので、氏康は戦わずに兵を府中まで引く。すると上杉軍は、これを見て、北条軍の戦意は低いと判断し、自軍の兵士が多勢であるということもあって楽勝気分が漂った。

敵陣に突入する

四月二十日（1546年5月19日）の夜、氏康は自らの軍を四隊に分け、一隊を多目元忠に指揮させて、戦闘終了まで動かないように命じ、氏康自身は残り三隊を率いて敵陣へ向かう。子の刻、氏康は兵士たちに鎧兜を脱がせて身軽にさせ、連合軍に突入する。

上杉軍は大混乱に陥り・・・

扇谷上杉軍の当主・朝定のほか、難波田憲重が討死した。また山内上杉方では憲政が戦場を脱出して上州平井に敗走し、重鎮の本間近江守らが討死した。

氏康はなおも上杉勢を追い散らし敵陣深くに切り込むが、戦況を後方より見守っていた

多目元忠は危険を察し、法螺貝を吹かせて氏康軍を引き上げさせた。城内で待機していた綱成らの一隊（「地黄八幡」編成と呼ばれていた。氏康は常に北条軍の先鋒として、無類の強さを見せ、常勝軍団としてその名を轟かす。八幡大菩薩に戦勝を祈願したといわれ、合戦では、朽葉色に染めた六尺九寸の練り絹に「八幡」と書かれた旗を指物としていたので、その旗色から「地黄八幡」と称えられた。「直八幡」の発音に通じるため「自分は八幡の直流である」というアピールであった。なお、綱成の「地黄八幡」の旗指物は現在、長野県長野市の真田宝物館に現存する）が、この機を捉えて打つて出ると、足利晴氏の陣に「勝った、勝った」と叫びながら突入し、既に浮き足立っていた足利軍も散々に破られて古河へ遁走した。連合軍の死傷者は一万三千〜一万六千人と伝えられている。

河越夜戦は・・・

三大夜戦として世に知られているが、大規模な夜戦の描写は、『北条五代記』（後北条氏五代の逸話を集めたもの）や、『関八州古戦録』（江戸時代に伝承を記しもの、享保十一年（1706））、『新編武蔵風土記稿』など、後世の軍記物による創作と推定されている。また『川越市史』にも、合戦の様子が詳細に記されているが、軍記物に類する記述が含まれているようだ。

この戦いの結果、当主を失った扇谷上杉家は滅亡し、敗走した関東管領の山内上杉家も急速に勢力を失う。一方、北条家は勢力圏を拡大し、戦国大名としての地位を固める。甲相駿三国同盟の締結により駿河今川家や甲斐武田家との対立に終止符を打つと、関東制覇を目指して越後の上杉家（長尾氏）や常陸の佐竹家、安房の里見氏との抗争を始めてゆく。

戦国時代へと・・・

関東公方としての足利家と、その執事となる関東管領の権威と軍事力は決定的に失墜し、代わりに後北条氏をはじめとする戦国大名が躍進した。

室町時代の枠組みは東国において消滅し、舞台は中京に移る。

戦いに明け暮れる戦国時代へと移行し、織田信長、豊臣秀吉の活動の時代から、徳川家康の江戸時代へと引き継がれる。

[. 長 享 の 乱 ⇨]

1514	1513	1512	1511	1510	1509	1508	1507	1506	1505	1504	1503	1502	1501	1500	1499	1498	1497	1496	1495	1494	1493	1492	1491	1490	1489	1488	1487	1486	1485	西暦	元号
永正11年	永正10年	永正9年	永正8年	永正7年	永正6年	永正5年	永正4年	永正3年	永正2年	永正元年	文亀3年	文亀2年	文亀元年	明応9年	明応8年	明応7年	明応6年	明応5年	明応4年	明応3年	明応2年	明応元年	延徳3年	延徳2年	延徳元年	長享2年	長享元年	文明18年	文明17年		
足利義植						足利義澄												足利義材			義政	足利義尚									
	義材は義植に改名		船岡山合戦で高国・義興連合軍が勝利する 前將軍の義澄が病死		北条早雲は武蔵に出兵して江戸城に迫る	前將軍の義材が大内義興・細川高国とともに入京。 將軍足利義澄は逃亡して義材が將軍復帰	永正の錯乱	山内上杉と扇谷上杉両家の同盟が復活する	山内上杉顯定は河越城を包囲して扇谷上杉朝良を降伏させる	立河原の戦い			早雲は三河に出兵する			明応の大地震	北条早雲は伊豆を平定する	日野富子が死去する	早雲が小田原城を奪う	扇谷上杉朝良が河越城に入って家督を継ぐ 定正、山内顯定と対陣するが落馬により死去	明応の政変(細川政元が將軍を廃立する) 北条早雲が伊豆に討ち入る		一月、足利義視が死没。四月、公方の政知死亡。八月、 義材は近江に出陣して六角高頼を追放する	足利義政が死去	義尚、近江鈎の陣中で病死	「長享の三戦」で山内、扇谷上杉氏が激突する	伊勢新九郎が伊豆に下向、興国寺城主となる	太田道灌が相模糟屋館に招かれて謀殺される 巡歴の高僧 道興准后が武蔵国を訪れる	十二月、山城国一揆による自治支配	江戸城に詩僧・万里集九が招かれる	

主な出来事

1545	1544	1543	1542	1541	1540	1539	1538	1537	1536	1535	1534	1533	1532	1531	1530	1529	1528	1527	1526	1525	1524	1523	1522	1521	1520	1519	1518	1517	1516	1515	西暦						
天文14年	天文13年	天文12年	天文11年	天文10年	天文9年	天文8年	天文7年	天文6年	天文5年	天文4年	天文3年	天文2年	天文元年	享禄4年	享禄3年	享禄2年	享禄元年	大永7年	大永6年	大永5年	大永4年	大永3年	大永2年	大永元年	永正17年	永正16年	永正15年	永正14年	永正13年	永正12年	元号						
足利義晴																							足利義植														
天文十五年 河越夜戦	鶴岡八幡宮の工事が落成する			天文十年、北条氏綱、病いで死去する	天文八年、国府台第一次合戦、葛西城を最前線として		氏綱は第一次国府台合戦で勝利、下総国を支配下に	氏綱は河越城を攻略する	扇谷上杉・朝興が死去、朝定が跡を継ぐ				安房・里見家の内訌が起こる	鶴岡八幡宮の再建が始まる						安房の里見氏が鎌倉に侵攻し、鶴岡八幡宮が焼かれる	扇谷上杉氏の朝興が武蔵の諸城を奪回して氏綱を包囲する	氏綱は太田資高を寝返らせて江戸城を攻略する	氏綱は伊勢から北条に改姓する				北条早雲、蕪山城で死去する	北条早雲は家督を嫡男の氏綱に譲る		北条早雲は相模三浦氏を滅ぼす(相模を平定)			主な出来事				

「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

市民フォーラムは地域情報紙「市民プレス」を編集・発行し、無料で配布します。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

編集部 原宛にどうぞ

TEL 090 (3048) 5502

本紙「市民プレス」は年四回(一、四、七、十月、各五日)発行